音楽の行方

赤津将大

あの「字路を

右に曲がると風の遊歩

横顔はたくさんのことを後ろに流した

どこもかしこもあまりに透けて

風が泣いた日

風は物を貫いて 表情もなく手荒に消し

白 黒 青 の盲いた線ばかりがあちこちで蠢いて

そのなかで遠く

彼はやさしく立っていた

砂漠を柔らかく裏返す

赤い風が吹いた日

生々しいのに心地よく

通過すると 彼は秋みたいに削れていた

そこに確かな季節はなく

口に残る鉄の味は

さっぱり頭上へ霧消した

世界が窪みをめがけて反り返る

すり鉢状の頭上が重く

右に左に天井よりも大きな背中がある

汚い意図や目的の純粹な歪みが

目の前で人体に浮かび 数え挙げられ

食卓で口に物を運ぶ自分が恐ろしく気持ち悪くて